

# 大学生の自尊感情と親の養育態度の関連

宮代 こずゑ, 岩岡 紗希

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第71号 別刷

2021年3月



# 大学生の自尊感情と親の養育態度の関連

## Survey on the Relationship between College Students' Self-esteem and Parental Attitudes

宮代 こずゑ<sup>†</sup>, 岩岡 紗希<sup>‡</sup>  
MIYASHIRO Kozue and IWAOKA Saki

### 概要 (Summary)

本研究は、大学生に中学時代の親の養育態度について想起して回答してもらい、大学生の自尊感情との関連を検討したものである。結果からは、各養育態度得点と自尊感情との間の関連が示された。このことは、中学時代の親の養育態度の長期的な影響が、子どもが大学生になった時点でも見られたと解釈することができ、中学生やその養育者に対するサポートの重要性が示された。

キーワード：自尊感情 養育態度 家族関係 きょうだい数

## 1. 問題と目的

### (1) 自尊感情に関する研究

自尊感情 (self-esteem) とは、「自己イメージの中核的な概念で、一つの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的な態度」であるとされる (Rosenberg, 1965) [1]。これまで、自尊感情は精神的健康との関連が数多く検討されてきた (たとえば, 中間, 2013) [2]。しかし日本人の自尊感情が諸外国と比べて低いという報告はいくつかある (たとえば, Schmitt & Allik, 2005) [3]。このような背景から、自尊感情を構成する概念やそれらに影響を与える要因を明らかにしようとする試みは多く行われている。

たとえば豊田・松本 (2004) [4] は、自尊感情と関連している要因として、家族統合度、両親との関係、過去の学校生活で得意科目および充実感があったこと、過去および現在の大学生活での友人関係、自己受容等があることを明らかにした。家族に関しては、家族統合度が高く、親子同士が「信頼している」、「うまくいっている」と認知している大学生の方が自尊感情がより高いことが示された。

### (2) 親の養育態度が子どもに与える影響

浜崎・依田 (1985) [5], 依田・飯島 (1981) [6] は、出生順位と性格特性との関連を検討し、長子は「几帳面で控えめであり、聞き手に回りやすい」といった特徴を持つものに対し、次子は、「おしゃべりでやきもちやきで、活動的」といった特徴を持つこととした。これは、親の持つ「長幼の序」という考え方が養育態度に現れ、親から子どもへの役割期待の相違が反映された結果、きょうだい間での性格の差異があらわれた解釈される。

<sup>†</sup> 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: miyashiro@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者 1)

<sup>‡</sup> 宇都宮大学 教育学部 卒業生

一方で、金山・篠山(1997)<sup>[7]</sup>は、長子・中間子・末っ子・一人っ子というカテゴリーごとに特有の性格があるとする考え方は、一種のステレオタイプの見方であると考えた。そこで、「きょうだい型」ステレオタイプが人々の間に存在しているかどうかを確認すること、そしてもし「きょうだい型」ステレオタイプが存在しているのであれば、先述した従来の研究結果と世間一般の話題は一致しているのかを検討した。結果として「きょうだい型」ステレオタイプの存在が確認され、親が「きょうだい型」のステレオタイプの躰を行ったことによって出生順位と性格に関連性が現れた可能性を示唆した。

両親の養育態度について、これまでの親子関係の研究では母子関係が中心になされてきた。しかし近年はこうした研究動向にも変化がみられ、父親にも焦点を当てたものも増えてきている。石川(2003)<sup>[8]</sup>は、「父親の支援が増すほど子どもの精神的健康は高まり、一方父親の統制が増すほど子どもの精神的健康は低下する」という仮説を導き、母親の養育行動の影響や親の社会経済的地位を統制した上で、父親の養育行動が子どもの精神的健康に与える影響を検討した。その結果、父親の養育行動は男子女子ともに影響を与えることが確認された。なお、その影響のは中学生においてより顕著であったことが示された。

### (3) 本研究の目的

青年期の終わりの時期に該当する大学生では、両親に養育される子の存在から自立した社会人へと移行していく時期である。そのため本研究では、それよりも前の時期の親の養育態度が、現在大学生である参加者の自尊感情にどのような影響をもたらしているのかについて焦点を当てた。そこで参加者には、自分の中学生の頃を想起してもらい、両親の養育態度について回答させるという手法を用いた。

よって本研究は、①大学生を対象に、子どものきょうだい数が両親の養育態度と関連しているかどうか、さらに②両親の養育態度が子どもの自尊感情にどのように影響を及ぼすのかについて、検討することを主な目的とする。

## 2. 方法

(1) 調査参加者 大学生247名(男性96名, 女性151名, 平均年齢 $18.80 \pm 1.12$ 歳)

(2) 調査内容

①年齢, 性別, 学部, 学年

②きょうだいの有無・きょうだい構成:

きょうだい構成について、きょうだいの性別・年齢の記述を求め、きょうだい数及び回答者の出生順位ときょうだい間での年齢差について回答を求めた。

③家族関係:

豊田・松本(2004)<sup>[4]</sup>が作成した7項目(私—両親関係4項目, 私—きょうだい関係3項目)を用い、「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で回答を求めた。

④両親の養育態度:

小林(2011)<sup>[9]</sup>が用いた養育態度尺度16項目を一部改訂し、「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの7件法で回答を求めた。

⑤自尊感情の測定尺度:

Rosenberg(1965)<sup>[11]</sup>が作成した自尊感情尺度を桜井(2000)<sup>[10]</sup>が修正したものをを用い、「いいえ」

から「はい」までの4件法で回答を求めた。

### 3. 結果

分析を行うにあたり、回答者247名のうち、きょうだい有無の記述がないもの、2ページ以上の回答の空白があるもの計17名を除き、230名（男性84名、女性145名、平均年齢 $18.82 \pm 1.15$ 歳）を分析対象とした。

#### (1) きょうだい数と親の養育態度の関連

参加者のきょうだい数の分布を表1に示す。きょうだいがいる参加者には2人きょうだい、3人きょうだいが多く、4人きょうだい、5人きょうだい、6人きょうだいの人数がそれぞれ10人未満であった。

表1 きょうだい数の分布

きょうだい数	1	2	3	4	5	6
度数(人)	32	112	74	8	2	2

そこで、きょうだい数(一人っ子、2人きょうだい、3人きょうだい、きょうだい多数)を独立変数、父親・母親のそれぞれの各養育態度得点を各従属変数とした1要因参加者間分散分析を行ったが、有意な結果は見られなかった。

#### (2) 父親の養育態度と大学生の自尊感情

全分析対象者230名のうち、父親の養育態度の尺度に回答のなかった10名を除き、220名を分析対象とした。

以下、中学時代の父親の養育態度により大学生の自尊感情に差が見られるかを検討するため、父親の各養育態度得点を独立変数、自尊感情尺度得点を従属変数とした $t$ 検定を行った。

##### ① 父親の「統制的な養育」と大学生の自尊感情

父親の統制的な養育得点の高い上位25%を「統制的高群」、得点の低い下位25%を「統制的低群」とし、「統制的な養育」得点を独立変数、自尊感情得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った。その結果、「統制的な養育」による自尊感情の差は認められなかった( $t(107) = 1.440, p = .153$ )。

##### ② 父親の「子どもへの無関心」と大学生の自尊感情

父親の「子どもへの無関心」得点の高い上位25%を「無関心高群」、得点の低い下位25%を「無関心低群」とし、子どもへの無関心得点を独立変数、自尊感情得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った(図1)。その結果、父親の「子どもへの無関心」得点によって自尊感情に有意な差が見られ( $t(106) = 2.807, p = .006$ )、父親が自分に対して無関心であったと考えている参加者ほど自尊感情がより低いことが示唆された。

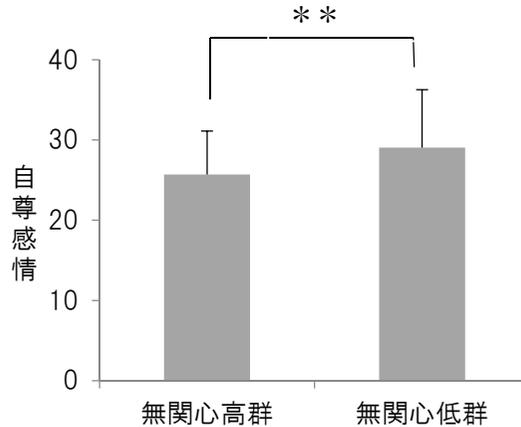


図1 父親の「子どもへの無関心」の度合いと大学生の自尊心(エラーバーはSD)

### (3) 母親の養育態度と大学生の自尊心

全分析対象者230名のうち、母親の養育態度の尺度に回答のなかった1名を除き、229名を分析対象とした。

以下、中学時代の母親の養育態度により大学生の自尊心に差が見られるかを検討するため、母親の各養育態度得点を独立変数、自尊心尺度得点を従属変数とした $t$ 検定を行った。

#### ①母親の「統制的な養育」と大学生の自尊心

母親の統制的な養育得点の高い上位25%を「統制高群」、得点の低い下位25%を「統制低群」とし、「統制的な養育」得点を独立変数、自尊心尺度得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った(図2)。その結果、母親の「統制的な養育」得点によって自尊心尺度得点に有意な差が見られ( $t(118) = 3.828, p < .001$ )、母親が自分に対して統制的であったと感じている人ほど、自尊心がより低いということが示された。

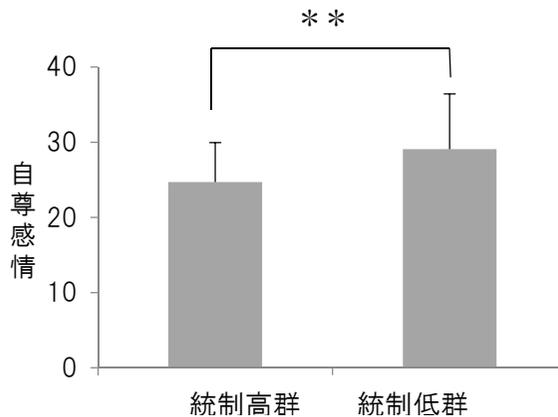


図2 母親の「統制的な養育」の度合いと大学生の自尊心(エラーバーはSD)

## ②母親の「子どもへの無関心」と大学生の自尊感情

母親の子どもへの無関心得点の高い上位25%を「無関心高群」、得点の低い下位25%を「無関心低群」とし、母親の「子どもへの無関心」得点を独立変数、自尊感情得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った(図3)。その結果、「子どもへの無関心」得点によって自尊感情に有意な差が見られ( $t(113) = 4.392, p < .001$ )、母親が自分に対して無関心であったと感じている人ほど、自尊感情がより低いということが示された。

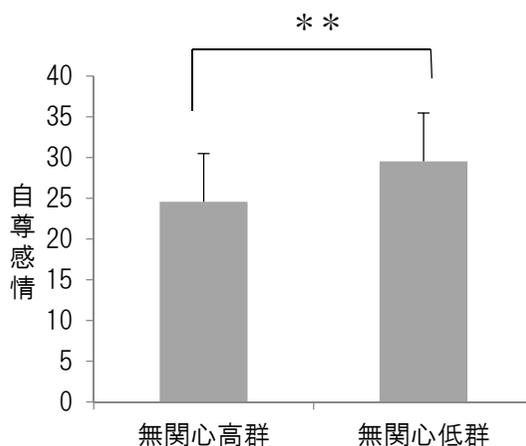


図3 母親の「子どもへの無関心」の度合いと大学生の自尊感情(エラーバーはSD)

## ③母親の「受容的な養育」と自尊感情

母親の受容的な養育得点の高い上位25%を「受容的高群」、得点の低い下位25%を「受容的低群」とし、「受容的な養育」得点を独立変数、自尊感情得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った(図4)。その結果、母親の「子どもへの無関心」得点によって自尊感情に有意な差が見られ( $t(103) = 3.173, p < .001$ )、母親が自分を受け入れていたと感じている人ほど自尊感情がより高いことが示された。

## (3) 家族統合度と大学生の自尊感情

家族統合度が自尊感情にどのような影響を及ぼすかを比較するため、家族統合度得点の高い上位25%を「統合度高群」、得点の低い下位25%を「統合度低群」とし、家族統合度得点を独立変数、自尊感情尺度得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った(図5)。その結果、家族統合度得点によって自尊感情に有意な差が見られ( $t(115) = 4.932, p < .001$ )、家族統合度が高い人ほど自尊感情が高いということが示された。

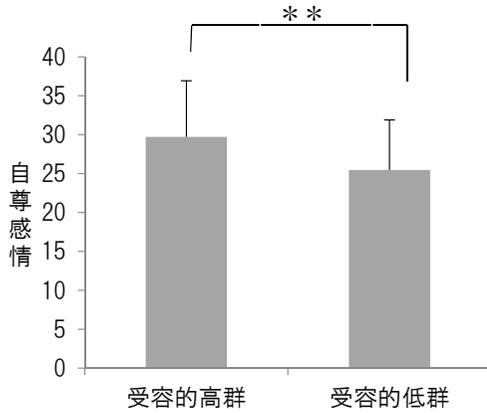


図4 母親の「受容的な養育」の度合いと大学生の自尊感情 (エラーバーはSD)

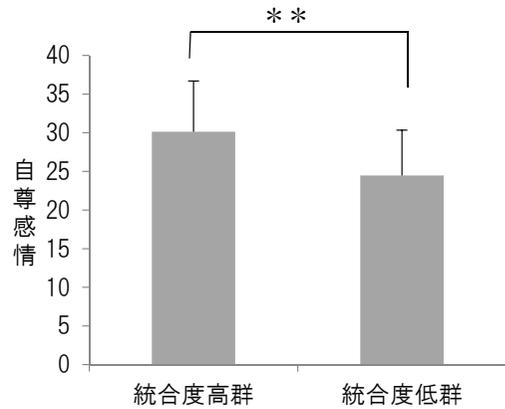


図5 家族統合度と大学生の自尊感情 (エラーバーはSD)

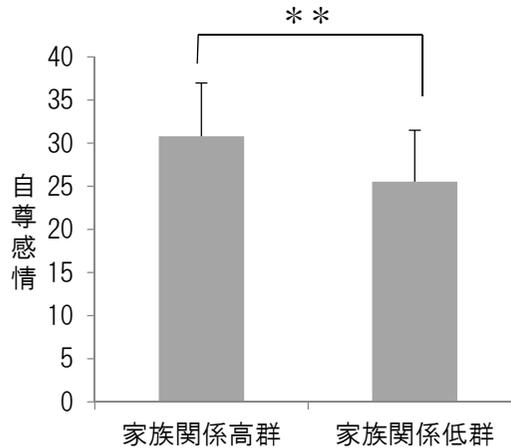


図6 家族関係得点ごとの自尊感情得点平均値 (エラーバーはSD)

#### (4) 家族関係と大学生の自尊感情

家族関係が自尊感情にどのような影響を及ぼすかを比較するため、家族関係得点の高い上位25%を「家族関係高群」、得点の低い下位25%を「家族関係低群」とし、家族関係得点を独立変数、自尊感情尺度得点を従属変数とした対応の無い $t$ 検定を行った(図6)。その結果、家族統合度得点によって自尊感情に有意な差が見られ( $t(103) = 4.423, p < .001$ )、家族関係が高い人ほど自尊感情が高いということが示された。

## 4. 考察

本研究の結果からは、子どものきょうだい数と親の養育態度の関連は見られなかった。

また、中学時代を想起して回答してもらった「親の養育態度」についてのデータからは、父親および母親が自分に対して無関心であったと感じている大学生ほど、自尊感情がより低いということが示された。また、母親がより統制的であったと感じている大学生ほど自尊感情がより低く、母親がより

受容的であったと感じている大学生ほど自尊感情がより高いということも示唆された。

このことから、中学時代の親の養育態度の長期的な影響が、子どもが大学生になった時点でも見られたと解釈することができる。中学生、およびその養育者に対する、周りからの支援が重要であると言えよう。

ただし今回、親の養育態度はあくまで子どもの立場から中学時代を想起して回答してもらったものであり、実際の中学時代の親の養育態度とは異なっている可能性もある。その場合は、回答時点での自尊感情の低さが想起内容に影響を与えている可能性もあり、大学生の自尊感情に変化があればまた想起の内容に変化がみられることも考えらえる。

## 5. 引用文献

- [1] Rosenberg, M. (1965) . *Society and the adolescent self-image*. Princeton, HJ: Princeton University Press.
- [2] 中間 玲子 (2013) 自尊感情と心理的健康の関連再考——「恩恵享受的自己感」の概念提起—— 教育心理学研究, 61, 374-386.
- [3] Schmitt, D. P., & Allik, J. (2005) . Simultaneous administration of the Rosenberg Self-Esteem Scale in 53 nations: Exploring the unicersal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89. 623-642.
- [4] 豊田 加奈子・松本 恒之 (2004). 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 創刊号, 38-54.
- [5] 浜崎 信行・依田 明 (1985). 出生順位と性格 (2) 横浜国立大学教育紀要, 25, 187-196.
- [6] 依田 明・飯嶋 一恵 (1981). 出生順位と性格 横浜国立大学教育紀要, 21, 117-127.
- [7] 金山 富貴子・笹山 郁生 (1997). 「きょうだい型」ステレオタイプの検討 福岡大学教育紀要, 46(4), 209-229.
- [8] 石川 周子 (2003). 父親の養育行動と思春期の子どもの精神的健康 家族社会学研究, 15 (2), 65-76.
- [9] 小林 真 (2011). 中学校時代の両親の養育態度が青年期の友人関係のあり方に及ぼす影響 とやま発達福祉学年報 2, 21-28.
- [10] 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.

令和2年10月1日受理





# Survey on the Relationship between College Students' Self-esteem and Parental Attitudes

MIYASHIRO Kozue and IWAOKA Saki